

〈博物館特別展〉

特別展「聖徳太子伝の世界—えがかれた和国の教主—」の開催に寄せて

学芸員・教授 宮崎 健司
(日本古代史)

大谷大学博物館の2008年度特別展「聖徳太子伝の世界—えがかれた和国の教主—」が、10月10日(金)から11月29日(土)まで、東京国立博物館・京都国立博物館・金沢大学附属図書館・京都大学附属図書館・多和文庫・天理大学附属天理図書館・東大寺図書館・徳川博物館・広島大学図書館・石山寺・叡福寺・光久寺・西大寺・四天王寺・瑞泉寺・知恩院・伝香寺・法隆寺・本願寺・本誓寺・六角堂頂法寺など各位の協力のもと開催された。今回は開館5周年の記念展にもあたり、国宝を初めて展示するなど大谷大学博物館にとっても画期となる展覧会となった。

内容は、太子伝の集大成である『聖徳太子伝暦』の形成と、その絵画化としての聖徳太子絵伝を中心に、太子の事績を紹介した「Ⅰ 厩戸皇子とその時代」、『聖徳太子伝暦』に至る太子伝を紹介した「Ⅱ “聖徳太子”の誕生」、『聖徳太子伝暦』の注釈書や派生した太子伝を紹介した「Ⅲ 聖徳太子伝の諸相」、太子伝の絵画化である聖徳太子絵伝を紹介した「Ⅳ 描かれた“聖徳太子”」の4つのテーマで構成され、書跡・彫刻・絵画など国宝4点と重要文化財8点、重要美術品1点を含む50点の作品が展示された。

「和国の教主」と仰がれた聖徳太子は、推古天皇の摂政として政治を補佐したが、「三経義疏」を撰述したとされるなど、仏法興隆の祖として彼自身も信仰されることになった。太子没後ほどなく、太子に関わる説話・伝承が生まれ、太子伝の制作により聖徳太子像が形成されていった。およそ100年後、養老4年(720)の『日本書紀』にはすでに聖人

として描写されている。

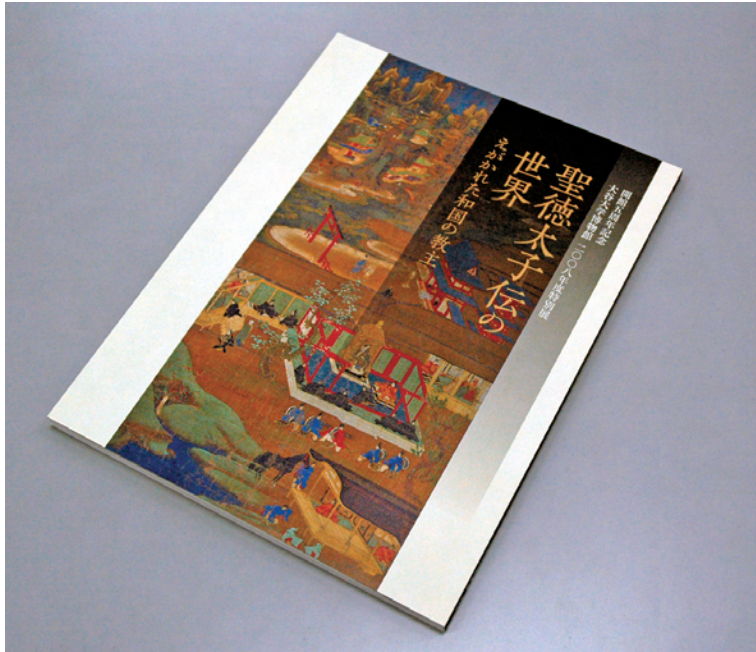
太子伝の制作は奈良時代以前にさかのぼり、7世紀末以前の「上宮記」(逸書)が最古とされ、現存最古のものは9世紀の『上宮聖徳法王帝説』で、その系譜記事は7世紀にさかのぼるもので、現在の姿には8世紀末から10世紀にかけてなったという。

奈良時代から平安時代にかけては重要な太子伝が制作された。8世紀後半の東大寺僧明一の「聖徳太子伝」(逸書)は、「根本規模之伝」とされ、最澄が「天台法華宗付法縁起」(逸書)に全文引載し、彼の高弟光定の『伝述一心戒文』(重要文化財 延暦寺蔵)に「上宮厩戸豊聡耳皇太子伝」として伝えられる。また四天王寺僧敬明らの『四天王寺障子伝』は宝亀2年(772)の『七代記』と同じとされ、今に伝わる『異本上宮太子伝』がその伝本とされる。

ついで延暦7年(788)唐僧思託の「延暦僧録」(逸書)の「上宮皇太子菩薩伝」は、『日本高僧伝要文抄』に引載され、その内容が伝わるが、南嶽慧思禪師後身説など重要な太子の説話を伝えている。さらに平安時代初期の『上宮聖徳太子伝補闕記』は伝説的な太子像を強調したものである。画期となった。

このような太子伝の制作と流布は、仏法興隆の祖としての太子像を普及させたが、薬師寺僧景戒の『日本霊異記』上巻第四縁の太子の説話は原撰本では冒頭にあったとされ、太子を日本仏教史の起点とする考えがあらわれるにいたった。

そして、それまでの太子伝を集大成したものが10世紀の『聖徳太子伝暦』である。父用



大谷大学博物館2008年度特別展
『聖徳太子伝の世界—えがかれた和国の教主—』図録

明天皇と母間人穴穂部皇女の婚姻からおこし、太子の受胎・誕生から薨去に至る事績と、山背大兄王事件や乙巳の変の蘇我入鹿滅亡までを記し、のちの太子伝に大きな影響を与えた。永観2年(984)源為憲の『三宝絵詞』巻中の冒頭には『聖徳太子伝暦』の事績を中核に太子伝が記され、はじめての平仮名の太子伝として、『今昔物語集』などに引き継がれた。また『聖徳太子伝暦』には多くの注釈書が制作され、暦仁元年(1238)顕真の『聖徳太子伝私記』、正和3年(1314)橋寺僧法空の『聖徳太子平氏伝雑勘文』、文安5年(1448)法隆寺僧訓海の『太子伝玉林抄』などがあげられる。

今回の展示で特に注目されるのは、「Ⅱ “聖徳太子”の誕生」と「Ⅲ 聖徳太子伝の諸相」で、太子伝の流れに関わる作品をほぼ網羅したことである。これまで、このような形での展示はあまり例がなかったのではないだろうか。しかも、国宝4点(京都国立博物館

蔵『日本書紀』巻22、知恩院蔵『上宮聖徳法王帝説』、興福寺蔵『日本霊異記』巻上、東京国立博物館蔵『三宝絵詞』巻中)と重要文化財4点(延暦寺蔵『伝述一心戒文』、東大寺図書館蔵『日本高僧伝要文抄』第三、興福寺蔵『聖徳太子伝暦』、本願寺蔵『聖徳太子伝暦』)に加え、研究者によく知られながら展観の機会のほとんどなかった広島大学図書館蔵『異本上宮太子伝』や徳川博物館蔵『上宮聖徳太子伝補闕記』が展示されたことも意義深い。また、大学設置の博物館である大谷大学博物館において国宝・重要文化財が多く展観された意義も大きいと考える。